

芥川龍之介「上海游記」のコンテクスト

——日本と中国の一次資料を通して見えてくる都市体験——

和田博文（東京女子大学教授）、高潔（上海外国語大学教授）、高麗華（上海外国語大学講師）、冷和華（上海外国語大学大学院修士課程・東京女子大学大学院博士前期課程）、宣語天然（上海外国語大学大学院修士課程）、張青（同）、楊中奕（同）、劉雨喬（同）、藥師寺美穂（東京女子大学大学院博士後期課程）、伊藤千秋（東京女子大学大学院博士前期課程）、川端あや（同）、原菜摘（同）。

はじめに

二〇二二年度前期に、東京女子大学大学院の和田博文ゼミと、上海外国語大学大学院の高潔ゼミは、博士前期課程の院生を中心に、ZOOMによる合同演習を行った。四月三〇日に説明会を開いて、五月二一日、二八日、六月四日、一一日、一八日と、合計五回実施している。芥川龍之介は大阪毎日新聞社海外視察員として、一九二一年三月二八日に門司を出航し、三〇日に上海に到着

した。異文化体験を基に芥川が執筆した紀行文学が「上海游記」『支那游記』一九二五年一月、改造社）である。合同演習の目的は、「上海游記」のコンテクストを、同時代の日本と中国の一次資料から読み解くことだった。本論文は合同演習の発表を発展させて、コンテクストを詳しい註釈の形でまとめている。巻末には、合同演習に参加してくださった高麗華講師の「中国における学術文献データベースの利用状況」と、高潔教授の「おわりに」を収録した。（和田博文）

「上海」 「第一警(上)」 「第一警(中)」 「第一警(下)」

■筑後丸 日本郵船編『日本郵船株式会社五十年史』(一九三五年一月、日本郵船)によると、一九一五年四月以降に上海航路の命令線は、神戸上海線が本線となり、横浜上海線が附属線になった。前者は週一回の運航で、三五〇〇噸前後の八幡丸と春日丸が就航し、大阪・門司に寄港している。後者は週二回の運航で、博愛丸・山城丸・近江丸・筑前丸・筑後丸が就航して、神戸・門司・長崎に寄港した。三六〇六噸と二五六三噸の船だが、筑後丸は最も小さい。二三年になると長崎上海間の日華連絡線に、五〇〇〇噸台の長崎丸と上海丸が投入される。しかし芥川が乗船したのは二一年三月なので、その二年前である。筑後丸は長崎丸・上海丸の半分の大きさしかなかった。

■郵船碼頭 図版Aは、杉江房造編『新上海』訂正増補再版(一九三三年二月、日本堂書店)の表紙。図版Bは、同書に収録された、芥川が降り立った埠頭である。同書は芥川が訪れた一九二一年末の各国居留民数を、①日本人一万六七七一人、②ポルトガル人三一四六人、③ロシア人三一〇四人、④イギリス人三〇八一人、⑤アメリカ人三〇二八人と紹介している。一〇〇〇人を超え

るのはこの五カ国だけである。六位以下は、⑥フランス人八四六人、⑦ドイツ人五六八人、⑧デンマーク人三三六人、⑨イタリア人二五〇人、⑩スペイン人一九一人で三桁の人数だった。

■村田君 嶋津長次郎編『支那在留邦人人名録』第一九版(一九二八年四月、金風社)の時点では、大阪毎日新聞社上海支局には、村田孜郎・波多野種一・田中幸利の三人が勤務していた。村田の著書・訳書は多い。一九四五年以前に出版された村田の本で、国会図書館所蔵本は二二冊を数える。単著は、『広東と香港』『北支那独立運動の真相』『支那女人譚』『支那の左翼戦線』『宋美齡』など一三冊。翻訳も精力的に行っていて、蒋介石『百千万民衆に訴ふ 附西安監禁半月記』、郭沫若『海棠香国』、陳東原『支那女性生活史』などがある。

■苦力 人力車夫についての芥川の描写には、コンテキストがある。嶋津長次郎編『上海案内』第九版(一九二一年二月、金風社)の「人力車」には、「人相を見て成る可く田舎者然たる者に乗る可きこと、賃金を先に定めて乗ること、車夫の前で金銭の有無を見せざること」と注意書きがある。同書の「悪車夫」は、「車が看板で泥棒が本業」という車夫もいると説明している。さらに「最近の新聞記事」として、「悪車夫の暴行―邦人金品を掠奪さる」や「悪車夫邦人婦人の胸倉を掴んで路上を引摺る」が紹介された。

これらの言説は、車夫を見る際のレンズとして、芥川の視線を予め規定している。観光とは、ガイドブックなどで事前に入手した情報を、現地で追認し、修正する行為である。

■東和洋行と万歳館 至誠堂編輯部編『上海一覽 附蘇州杭州案内』（一九二四年一月、至誠堂新聞舗）が紹介する日本旅館は、全部で一四館。同書によれば芥川が訪れた一九二一年の上海在留日本人数は一万七七七人で、日本旅館はまだ一〇館だった。三年後の在留日本人数は一万九〇二六人で二・三九人増加している。二三年に長崎丸と上海丸が就航して、観光客は増加した。それに対応するように日本旅館も四館増えている。東和洋行と万歳館は、上海の代表的な日本旅館である。芥川は「上海游記」に「昔金玉均が暗殺された、東亜洋行と云ふホテル」と書いているが、旅館名は間違っている。図版Cは、『新上海』に掲載された東和洋行の広告で、「金玉均事件」を売り物にしている。

■四馬路 『上海案内』の「市街の状況」によると、上海を代表する二つの街路が、南京路（大馬路）と福州路（四馬路）だった。前者は昼の上海を代表し、後者は夜の上海を代表する。福州路は「上海のパラダイス」で、劇場・茶館・酒樓などが立ち並び、夜になると妓女や遊客で一杯だった。東京の吉原、京都の祇園に譬えられる名所である。初めて上海を訪れた日本人が、まず案内

される場所だった。芥川も最初の夜に赴いている。「上海游記」には「カフェ・パリジャンへ、ちよいと舞踏を覗きに行つた」という一節がある。『上海案内』の「上海のカフェ」によると、この店はフランス租界の愛多亜路にあつた。

■黄包車 『上海案内』の「人力車」によれば、黄包車は東洋車とも呼ばれる。人力車は日本から輸入されるが、中国人は日本を「東洋」と呼んでいたからである。共同租界の黄包車が、フランス租界に入るためにはフランス租界の鑑札が、旧城に行くためには「支那界」の鑑札が必要だった。三つの鑑札がなければ、エリアを跨ぐことはできない。一九一八年の共同租界内の黄包車は、自用車が約六二〇〇輛、営業車が約八〇〇〇輛。車夫は営業者から黄包車を一日五く六角で借り、賃賃を払うと五く六角しか残らなかつた。（和田博文）



図版A 杉江房造編『新上海』訂正増補再版（一九二三年二月、日本堂書店）の表紙。



図版B 杉江房造編『新上海』訂正増補再版（一九二三年二月、日本堂書店）に収録された、芥川が降り立った埠頭。

當館は明治二十年の創業にして朝鮮の人傑金玉均事件を以て有名なり、館は蘇州河に臨み閑静にして且つ又便利の位置に在り

旅

東和洋行

上海大會議社、各銀行
上海商業會議所
上海物品陳列所
上海郵政總局
各汽船發着毎に當館の徽章ある店員數名出張送迎候
間御用命奉願上候

館

上海大會議社、各銀行
上海商業會議所
上海物品陳列所
上海郵政總局

在最近

電話七三三六
電報北三三三
郵政大第五八六七
電話六三



図版C 『新上海』に掲載された東和洋行の広告。

「一 海上」「二 第一瞥(上)」「三 第一瞥(中)」
「四 第一瞥(下)」

■埠頭・虹口碼頭 一九世紀にイギリス商人ヘンリー・シャーマンが上海で創設した新聞社「字林洋行」で発行された英文新聞『North China Daily News (字林西報)』一九二二年三月三十一日号の「ARRIVALS (到着)」には、「Mar 30 chikugomaru NYKW」などの記載があった。図版Dは杉江房造著、森武久製図『最新大上海地図』(一九三九年七月、日本堂書店)に収録された「N.Y.K. Wharf」これが芥川が降り立った日本郵船株式碼頭「Nippon Yusen

Kaishiki Kaisha Wharf」である。虹口碼頭は近代日本が建設した最初の上海碼頭であり、『清国上海領事館前面ニ於テ日本郵船會社ニ於テ借用請願行一件』(二八八年、外務省外交史料館所蔵)および『工部局董事會會議録』第一四冊(二〇〇一年、上海古籍出版社)によると、虹口碼頭の建設において日本郵船會社は一八八八年から八九年にわたり、上海總領事館、工部局と水上使用権や道路使用権をめぐり、複雑な交渉を行った。その結果、工部局との和解成立により日本郵船會社は虹口碼頭の整備を遂げ、上海港湾での権利を確保した。

■鉄橋・外白渡橋(ガーデンブリッジ) (清)毛祥麟『墨余録』(二八七〇年刻印、一九八五年上海古籍出版社より印刷発行)には、外白渡橋の前身である、イギリス商人ウィルズ (Wills) が建設したウィルズ橋は「橋を使用するものに二文を課し、車や馬車の場合は倍する」という道路課金についての記載があった(具体的金額について諸説あり)。上海古籍出版社編『工部局董事會會議録』第五冊(二〇〇一年、上海古籍出版社)によれば、課金による往来妨害に対する解決策として、工部局は「不安全」という理由でウィルズ橋を廃止し、ウィルズ橋の近くで新しい木橋「ガーデンブリッジ (garden bridge)」を建設した。当時の「頭擺渡橋」と区分して上海市民はこの橋を「外擺渡橋」と称し、な

まって「外白渡橋」となった（無料で通過できるための「白渡（ただで渡る）」という名前の由来説もある）。一九〇六年に電車を開設するために、木橋を工部局が鉄橋に改造した。

■達磨船・舢舨船 「達磨船」というエンジンがなく、港内で群っている木造船に近いと想定されるのは、商務印書館編『上海指南』第二版（一九二二年九月、商務印書館）に記載された、タグボートを使わずに自力で移動する赤色の「舢舨船」である。

（清）藜床臥読生『上海雑誌』（初版は上海文宝書局一九〇五年刻印、二〇二〇年上海書店出版社より『近現代史料筆記叢刊（全一〇冊）』（第一〇巻）に編入出版）によれば「舢舨船」は「江を渡る小さな船」で、最大三人が乗れるという。『上海指南』には乗船の注意点として、途中でのぼったりりるを避けるには乗船前に料金を確認することが必要であると特筆されている。この点以外では、「舢舨船」は便利な水上交通といえよう。図版Eは商務印書館編『上海指南』第二版（一九二二年九月、商務印書館）に収録された蘇州河（江蘇省の太湖を水源とする吳淞江が上海市西部を流れる下流の部分、川沿いをさかのぼれば蘇州に到達できるゆえ、上海市内では「蘇州河」と呼称されている）沿岸の舢舨船の写真。

■印度人の巡査 一八四五年に上海道台宮慕久と初代イギリス領事バルフォア G.Balfour とが定めた『第一次土地章程』（Land

Regulations イギリス国立公文書館所蔵）に記載された「更夫（watchman）」が、租界巡査の起源とされる。上海古籍出版社編『工部局董事会會議録』第一冊（二〇〇一年、上海古籍出版社）によると、五四年に、工部局役員会第一回會議で、役員らはイギリス人巡査募集の広告を掲載することを決めたという。その後中国人巡査を雇用することもあった。八三年の役員會議（上海古籍出版社編『工部局董事会會議録』第八冊（二〇〇一年、上海古籍出版社）による）では、「インド人より交通巡査に向いている人はない」と、インド人巡査を募集することが決定された。当時のインド人巡査は民族衣装として常に頭に「ターバン」という赤い布を巻くため、（清）葛元煦『滬遊雜記』（一八七六年刻印、一九八九年上海古籍出版社より印刷発行）では、上海市民は彼らを「赤い阿三（阿三）はインド人への蔑称」「赤目ハエ」と呼んでいると記述している。

■シェツプファアド 『North China Daily News（字林西報）』一九一五年四月二十六日号の報道によると、江西路31番に位置するシェツプファアド・カフェは一九一五年四月一七日（「翌日」）に開業する予定だという。シェツプファアドの中国語名と位置情報について気になるのは、『The North China Desk Hong List（字林西報行名録）』一九一五年七月号には「八珍樓 31 Kiangse Rd. Shepherd's

「Cafe」と登録されていたが、同名録の一九一六年号及び一九一七年号には「八珍樓 33 Kiangse Rd.」、一九一九年七月号には「久大 31/35 Kiangse Road」、一九二〇年一月号と七月号には「久大 31/33 Kiangse Road」と変わった点である。また『上海商業名録』（一九二〇年、商務印書館）に記載されたのは「八珍洋行 江西路三三三号」である。増築／リフォームの報道が見当たらないため、上記の位置情報の相違はおそらくシェフアアド・カフェが江西路三二一三三三号／三五号をまたいだからだと推測される。

■ カッフェ・パリジアン カッフェ・パリジアンは経営者 Frederick Davies が一九一九年に Edward VII アベニュー (Avenue Edward VII 愛多亜路) にあるカフェ「café trianon」を買収し、それを増築した上で新しく開いた、舞踏場付きのカフェレストランである(一九一九年七月三日の『The China Press』と『字林西報』一九一九年一〇月二八号による)。報道には位置情報について「Ben Buiding」とあるが、『上海商業名録』(一九二〇年、商務印書館)には「順豊 愛多亜路二五から二七番」、「字林西報行名録」一九二一年七月号には「順豊 25 Avenue Edward VII」と詳しい位置が記されている。ジャズバンドについては、『字林西報』一九一九年一〇月二八号と『The China Press』一九一九年二月一四

日号によると、カッフェ・パリジアンはピアノリスト Harry Kerney、バイオリニスト Peter Lyons、バンジョー奏者 Russell Ellis、サクソフォン奏者 Ray Breck を始めとするミュージシャンたちからなる優秀なジャズバンドを誇っている。(楊中奕)



図版D 杉江房造著、森武久製図『最新大上海地図』(一九三九年七月、日本堂書店)に収録された「N.Y.K. Wharf」。芥川が降り立った日本郵船株式会社碼頭「Nippon Yusen Kabushiki Kaisha Wharf」。



図版E 商務印書館編『上海指南』第一二版(一九二二年九月、商務印書館)に記載された、タグボートを使わずに自力で移動する赤色の「舢舨船」。

「五 病院」「六 城内(上)」「七 城内(中)」「
八 城内(下)」

■骨董屋(上海) 芥川は島津四十起氏の案内で、上海城(上海の城隍廟)内へ向かい、茶館「湖心亭」の池に向かって小便をしている中国人と出くわす。「その先の露路」には、嶋津長次郎編『上海案内』第九版(一九二二年二月、金風社)の、「上海の会社商店の多き所在地」の「骨董商」の項に「城内湖心亭側」とあるように、沢山の骨董屋があった。同じく『上海案内』の「みやげものや」の広告(図版F)の、「骨董好きの方へは骨董らしき物」という店主の口上からは、「骨董」がすでに上海のみやげものとして認識されていたことがわかる。またここでは、本文にある「七宝」「硯屏」などを扱った店が存在したことも確認できる。しかし店主の「らしき物」という言いまわしや、芥川が「五割方は懸値」と言っただけで店々を覗いていることから、当時の上海で希少価値、美術的な価値がある「骨董」を探すことは難しかったと考えられる。

■硯屏(けんびょう・けんぺい) ほこりや塵を防ぐために硯の横に置く小さな衝立のこと。上海城内で見たのは、「大理石の硯屏」だったが、『百舛』(一九二四年九月、新潮社)にある随筆

「野人生計事」(一九二四年の『サンデー毎日』第三年第二・三号に「野人生計の事」の題で掲載)や「身のまはり」(一九二六年の『サンデー毎日』第五年第二号に掲載、生前の単行本には未収)によると、芥川が使っていた硯屏は青磁だった。もともとは室生犀星が団子坂の骨董屋で見つけ、芥川は勧められるまま購入したのだった。北区の田端文士村記念館には復元された芥川の書斎「澄江堂(ちようこうどう)」が展示されている。雅号に因んで名付けられた書斎、庭づくりにも趣向を凝らし、詩書画に長けた芥川は、日常に骨董を取り入れていた。

■仇英(きゅうえい)、生没年不詳、一六世紀明代蘇州の画家)

人物・鳥獸・山林・樓閣・車馬など多くの画題を描いたが、仕女図すなわち美人画に名声がある。技巧はもとより、中間色多用した優雅な色彩処理に特色があり、影響は清代にも及んだ。芥川が「恐るべき」と言い添えたように偽物の数も夥しい。

■香取秀真(かとり ほつま、一八七四〜一九五四、鍔金家・金工史家・歌人) 東京美術学校が一八八九年、上野に開校されると、便が良かった田端に香取秀真をはじめ多くの芸術家が転入

した。「芸術家村」となった一帯に、東京帝大生だった芥川、やがて室生犀星、堀辰雄、萩原朔太郎も居を構え、大正から昭和にかけて「文士村」となった。後にアララギ派に発展する根岸短歌

会設立にも貢献し、歌人でもあった香取を、芥川は「お隣の先生」と呼び書簡も多く交わした。「先生と隣り住みたる為、形の美しさを学びたり」と「田端人」（一九二五年の『中央公論』第四〇年第三号に「わが交友録（二）」の大見出しのもと掲載、生前の単行本には未収）にも残している。諏訪湖に滞在していた芥川から、名物の蜆を送ったのに添えたと思われる香取宛の手紙（一九二〇年一月三日）が早稲田大学図書館に残されている。

■骨董商（日本橋） 東京京橋、そして日本橋をまたぐ東仲通

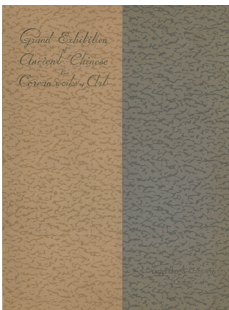
りは、別名「骨董通り」と呼ばれ、現在も古美術商、画廊、ギャラリーが立ち並ぶ。一六〇三年日本橋川に日本橋が架けられ交通の要所として定められたこの地は、江戸時代の町人文化の中心地であった。一九〇五年渡清、北京に居住し営業活動を始めた爾山龍泉堂の爾山松太郎は、一七年に京橋に店舗を構えた。また大阪山中商会の山中定次郎は、一八九〇年渡清、海外販売を目的に瑠璃廟や東単牌楼などを回った。同商会は、一九一八年株式会社として設立、ニューヨーク、ボストン、ロンドン、北京、上海そして日本橋に出張所を持った。「東京日本橋通りを徘徊した方が好きそう」とはこれらの日本の骨董商の勢いを示しており、そのコレクションは、例えば『支那朝鮮古美術展観目録』（一九三四年五月、主催山中商会、後援東京美術倶楽部）（図版G）に見ることが

できる。在天津日本総領事館編『天津貿易年報』（一九二〇年〜二三年、在天津日本人商業会議所）などによれば、上海だけでなく天津などからも、日本や欧米に向けて、多くの骨董が輸出されていたことがわかる。その中には、「清朝秘宝」も含まれており、古物保護を案ずる声は『順天時報』（図版H）にも残されている。

（薬師寺美穂）



図版F 嶋津長次郎編『上海案内』第九版（一九二一年二月、金風社）の「みやげもの」の広告。



図版G 『支那朝鮮古美術展観目録』の表紙（一九三四年五月、主催山中商会、後援東京美術倶楽部）。



図版H 社説「宜保護清朝之宝物」『順天時報』（一九一六年二月二十九日、同年二月二三日『大阪朝日新聞』の社説の中国語訳）。

「五病院」「六城内(上)」「七城内(中)」「八城内(下)」

■城壁 吳馨編『上海拆城案報告』（一九一四年二月、出版社不詳）によれば、上海東城の城壁は一五五三年に建てられ、外敵の侵入を防ぐ役目を担っていた。それから長年修理を怠って、民国時代には既に老朽化していた。また、内外交通の妨げになった

（詳）

め、一九一二年に上海政府は、城壁解体の特別事務所を設置し、民政署長吳馨に所長を担当させた。図版Iは、『真相画報』第一巻第五号（一九一二年七月、真相画報社）に掲載された解体工事の現場である。工事は一四年冬に完了し、旧城壁の北の区間を民国路、南を中華路と名付けた。芥川が当時渡った「広い往来」というのはフランス租界と上海東城の間に横たわる民国路である。

■湖心亭 上海通社編『上海研究資料』（一九三六年五月、中華書局）の紹介では、湖心亭は清代に豫園の池中央で建てられた、左右に九曲橋で繋がれている亭の通称である。一九一〇年に劉慎康に買取され「宛在軒茶樓」となった。劉氏が接待の仕方、茶座の清潔さなどに拘りを持ったため、「宛在軒」は文人や外国客にも多く評価されていたが、芥川が「荒廃を極めた茶館」と言ったのは、当時の豫園は城隍廟の一部となって、庭園というより商業に重心をおく市場に近く、建築の修繕を怠り、嘗ての誇れる風景は殆ど廃れたのである。

■茶館 商務印書館編『上海指南』第二二版（一九二二年九月、商務印書館）の「茶館」によると、上海の茶館は数多く、城隍廟内でも密集している。お茶の値段は大抵三、四〇文く六、七〇文となる。お茶を楽しむ他、商売人などは茶館を打ち合わせの場として利用している。徐柯編『清稗類鈔』第五版（一九二八年八月、

商務印書館)は、地元住人が茶館へ駆け寄って集まる際に一切換気せず、悪臭がひどく、伝染病にかかる者が大勢いると記していた。

■辮子 陳栄広編『老上海』(一九二四年二月、泰東圖書局)は民国初期の剪辮運動について記載している。民国政府の「剪辮令」に応え、革新を目指す有識者が満州清朝の象徴とも言われる長い辮髪を自発的に剃る反面、村里の農民はその風潮に抵抗した。後に政府は兵士に強制的に剪辮を実行し、芥川が上海へ来た一九二一年には、辮子はかなり希少になった。

■尿臭 張鏡予編『社会調査 沈家行実況』(一九二四年八月、商務印書館)の「健康と公衆衛生」の調査結果を見ると、民国時代に上海の街に公衆便所は建てられていたが、露天構造のために蠅を招きやすく、伝染病を拡散する危険がある。その上、清掃作業も疎く、二三日ごとにしか掃除を施さない。高温の天気になると、随所に排列された便所が原因で、街中が蠅に占拠されてしまう。『上海指南』によると、工部局は既に租界の衛生改善に取り組んでいたが、租界外の上海県城の管轄が緩いため、改善の進みが遅かった。

■乞食 曲彦斌『中国乞丐史』(二〇一六年六月、武漢大学出版社)は、一九三三年吳元淑、蔣思壹により作成された未発表論文

の草稿「上海七百个乞丐的社会調査」を掲載している。それによると、上海租界では管理が厳しい故、城隍廟をはじめとする城内の寺が乞食の本拠地となっていた。参拝者が雲集するため、「収入」も嵩張るからである。芥川が見かけたのは物乞いの中でも代表的な「告地状」の手法である。自ら練習するか他人に書いてもらって、秀麗な筆法と切実な文章で心を動かす狙いだが、内容は基本的にパターン化している。

■城隍廟 火雪明編『上海城隍廟』(一九二八年三月、青春文学社)によれば、城隍廟は東西二つの庭園に分かれている。湖心亭のある西園から南へ行くと、芥川の言う「名高い城内の城隍廟」、東園の入口になる。上海の城隍神である明朝の文人「秦裕伯」はそこで祀られている。城内外問わず押し寄せてくる参詣人で栄えてきた城隍廟は、門前や周囲に商店街ができ、象牙、中国骨牌、宝石など様々な店舗に囲まれていた。なお、芥川が言及した「賊城隍」の記載は清代徐昆の短編怪異小説『柳崖外編』(九五年一月、吉林大学出版社)の巻五「両城隍」に見られる。猗氏県というところの住人が未亡人の姉の財産を奪おうと城隍に犬の肉を供え、姉に呪いをかけたことを皮切りに、噂で駆け付けた万引きなどが做って折れば必ず応えられた。そのため、地元の人には旧城隍の靈廟を「賊城隍」と呼んでいた。

■纏足 雅礼新化学生会編『国民性改造運動』（一九二三年六月、雅礼新化学生会）は女性の縛られて縮んだ足を美しいとする昔の思想を批判した。そして問題となったのは、国民生活の近代化に向けて、政府は纏足を悪しき風習として禁令を出したにも拘らず、剪辮と同じように辺境の農村ではすぐに思想を変えることが難しく、纏足を解かない人は大勢いた。

■鳥屋 李世芳、薛志英「城隍廟的写生」（『現象』第一二号、一九三五年一二月、現象図書刊行社）の記述では、城隍廟には軒を並べるくらい鳥屋が連なつて、「あらゆる鳥を入手すること」が可能である。図版Jは、同記事で掲載された鳥屋の一面に架かる鳥籠である。『上海研究資料』によれば、豫園の池近くにある三カ所の禽鳥市場で南方に分布する鳥が並んでいた。のみならず、城隍廟の茶館にも鳥籠の掃除サービス付きの鳥を扱う専用フロアーを設け、そのの梁間に鳥籠を大量にぶら下げることが多い。

（言語天然）



図版I 『真相画報』第一卷第五号（一九二二年七月、真相画報社）に掲載された解体工事の現場。



図版J 李世芳、薛志英「城隍廟的写生」（『現象』第一二号、一九三五年一二月、現象図書刊行社）で掲載された鳥屋の一面に架かる鳥籠。

「九 戲台（上）」 「十 戲台（下）」 「十一 章炳麟」 「十二 西洋」

■看戲と聴戲 島津長次郎は『上海案内』第九版（一九二二年二月、金風社）で、唱戲を従来の支那劇の特色とし、所作や台詞より唱が第一であり、看戲より聴戲と云われる位であった、と述べている。ところが、清末の新派劇の発生で支那劇界に一大革命が起り、従来なかった背景が用いられ、所作や台詞も重視されるようになるが、旧劇では唱の価値は変わらず、と続ける。また、「芝居を見る（看戲）なら」では、「芝居を見んとすれば売場で切

符を買ふに及ばずいきなりヅカヅカと勝手な場所に入り込み席定まつて後切符を「買う」と記す。「上海游記」に、「芝居を見る順序を云へば、一等だらうが二等だらうが、ずんずん何処へでもはいつてしまへば好い。支那では席を取つた後、場代を払ふのが慣例だから」という類似表現がある。

■速成の劇通 「上海游記」には、「上海では僅に二三度しか、芝居を見物する機会がなかつた。私が速成の劇通になつたのは、北京へ行つた後の事である」とある。「北京日記抄」(『改造』一九二五年一月)と併せて読むと、上海では、亦舞台、天蟾舞台で「玉堂春」、「梅龍鎮」、「売身投靠」を、北京では三慶園、吉祥茶園、同樂茶園で「楊小樓」、「胡蝶夢」を観たことがわかる。観劇の同行者は、主として村田孜郎、辻聴花、波多野乾一である。三人は芥川の京劇指南役であり、「北京日記抄」には「劇通中の劇通」の辻と「波多野君」に挟まれて「胡蝶夢」を観た場面が出てくる。

■支那劇の心得 「上海游記」には、「支那の芝居の特色は、まづ鳴物の騒騒しさが想像以上な所にある」とある。村田孜郎は、『支那劇と梅蘭芳』(一九一九年五月、玄文社)の「支那劇の見方」で、「支那劇は唱を第一とし、科白所作を第二に置いてあるから、其見方も(中略)観る方よりも寧ろ聴かねばならぬ、これよりして支那劇を観るには先づ脚本の筋を心得て置くことが肝要である、

演劇の内容を知らず言葉も分らぬのでは之を観之を聴いて何等の趣味も感興もあるまい、日本人が初めて支那劇を観て銅鑼の音が喧しく甲高い声が耳障りとなつて半時も座に居堪らぬことがあるのは全く脚本の筋を弁へずその騒々しい所ばかりを見るからである」と、観劇の心得を示している。

■支那劇の特色 辻武雄『支那芝居』下巻(一九二四年二月、支那風物研究会)には、戲台について「支那では舞台のことを、戲台、前台とかいひ、橋掛りを取り除けた我が能舞台の模様によく似てゐる」という説明がある。また、同書上巻(一九二三年一月)では、支那劇の特色として一二項目があげられ、各々について解説されている。例えば「聴戲と看戲」、「幕なし」、「背景と道具」、「限取」等である。「上海游記」においても、「支那の芝居の第二の特色は、極端に道具を使はない事である」や、「支那の芝居の第三の特色は、限取りの変化が多い事である」という記述がある。図版Kは、同書上巻の口絵「支那役者の附け髭」。

■「演劇新潮談話会」 「上海游記」には、緑牡丹を菜屋に訪問した時の様子が描かれている。「村田君の話によると、梅蘭芳が日本へ来た時、最も彼を驚かしたものは、菜屋の綺麗な事だつたと云ふ」とある。梅蘭芳は二度目の来日の折(一九二四年一〇月)に、演劇新潮談話会に招かれ、その席で芥川や波多野らと対面し

た。北京では「毎晩やたらに波多野さんがグルグル連れて歩いてくれたので、何所でどういふ芝居を見たか分らない」が、「やつぱり梅さん」のが一番よかった、と芥川は周囲を笑わせている。図版Lは、「演劇新潮談話会」の写真（『演劇新潮』一九二四年一月）。

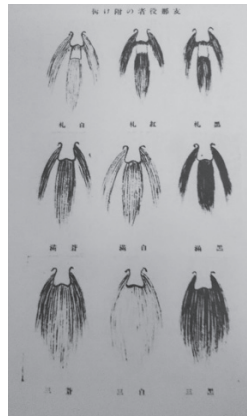
■パブリック・ガーデン 島津長次郎は『上海案内』第九版で、パブリック公園の入園規定を、「此公園へは支那人は外人雇アマ若しくは園丁の外一切入るを許されず、又此処に注意す可きは邦人も子供婦人の外洋服若くば羽織又は袴着用のものならざれば入場することを得ざるの規則なり」と記している。一方、杉江房造の『新上海』（一九二三年二月、日本堂書店）には、「ガーデンには園規あり左の如し」として六項目を列挙している。「一、自転者及犬を引き入れざる事」、「二、乳母車は園内の小路を進行し事」、「三、花を採り鳥の巢を荒し草花を傷め樹木を害す可からず」、「四、音楽堂に登る可からず」、「五、欧米人の婢僕にあらざる支那人は園内に入る可からず」、「六、支那人の子供は西洋人の同伴にあらざれば入る可からず」。加えて「吾が領事館に規定あり婦人小供の外人は着袴し足袋を穿つか洋服を着せざれば園内に入るを得ず。園の西方道路を越えて温室あり草花四時香を放ち美を競ふ園丁に告げ入るを得、一覽に値す」と記している。いづれも、「上海遊記」

の記述「外国人ははいつても好いが、支那人は一人もはいる事が出来ない」とは食い違う。図版Mはジャパン・ツーリスト・ビューロー編『上海』（一九三九年三月、日本国際観光局）の口絵。

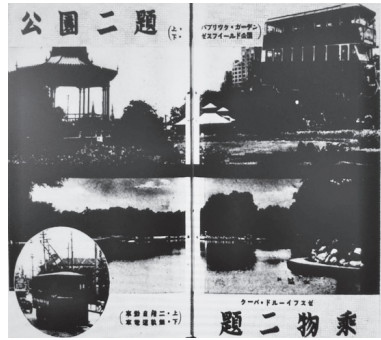
（伊藤千秋）



図版L 「演劇新潮談話会」の写真（『演劇新潮』一九二四年一月）。



図版K 辻武雄『支那芝居』上巻（一九二三年一月、支那風物研究会）の口絵「支那役者の附け髭」。



図版M ジャパン・ツーリスト・ビューロー編『上海』(一九三九年三月、日本国際観光局)の口絵。

「九 戲台」(上)「一〇 戲台」(下)「一一 章炳麟」
「一二 西洋」

■蓋叫天 何慢、龔義江編『粉墨春秋・蓋叫天舞台芸術経験』

(一九八〇年一月、中国戯劇出版社)は蓋叫天の口述を、何、龔両氏が整理編集したもの。蓋叫天は、本名が張英傑、河北人。八歳で隆慶和科班に入り、武戯の啓蒙先生は老斉で、文戯は一歳のとき、上海で陳福奎から学んだ。既に知名度のある長兄英甫(芸名「賽陣風」)に助けられ、武旦を志した。顧曲周郎編『男女名伶小史』(一九二二年四月、中外書局)の紹介によると、蓋叫天は短

打戯で武生役の第一の人選であった。図版Nは『粉墨春秋・蓋叫天舞台芸術経験』に載せられた、蓋叫天が「全本武一〇回」の『快活林』での扮装の写真となっている。

■緑牡丹 秦剛が二〇〇八年に上海外国語大学日本学研究国際フォーラムで発表した『一九二二年・芥川龍之介の上海観劇』で『亦舞台の楽屋であった「緑牡丹」(?)』の題目通り、秦氏は白牡丹と緑牡丹を比較し、白牡丹を緑牡丹に間違えたことを指摘した。(https://slideshow.jp.com/doc/2490203_最終アクセス日:二〇二二年八月二一日)また追加として、芥川は緑牡丹を蓋叫天・小翠花と並べて当代の名伶と称したが、『男女名伶小史』によると、緑牡丹は白牡丹が名を馳せた時まだ未熟な子供で、成長するに連れて、大世界舞台に登場し、自ら名伶と称した。これらを総合すると、芥川は当時緑牡丹ではなく白牡丹に会ったことがわかる。

■小翠花 桂枝編『小翠花小史』(一九三八年六月七日、上海晶報館)によると、小翠花は本名が于連泉、字は紹卿、号は桂森。山東登州人。九歳に鳴勝和班で「盛琴」という名で劇を学び、芸名を「小牡丹」という。一〇歳のときに鳴勝和班は解散し、「連泉」という名で富連成科班に入り、芸名を「小翠花」と改めた。当時は蕭長華と郭春山から教わり、「蹻功」という技を得意としていた。一九一七年班で八〜九ヶ月ほど手伝いをし、斌慶社と共に祥園で

出演し、一九一九年二月に漢口で五カ月間の演出を終え、その後上海の天蟾舞台に登壇した。『男女名伶小史』の「小翠花」によると、彼が主にしたのは秦崑崙黄皮である。得意とする劇は「得意縁」、「昭君出塞」、「遊龍戲鳳」、「打櫻桃」、「貴妃醉酒」、「虹霓関」等と綴られていた。図版〇は上海光報社編『光報』（一九二五年四月二十六日）に掲載された、小翠花が「梅龍鎮」の鳳姉を扮した写真である。

■梅龍鎮 凌善清、許志豪編『新編戲学滙考・第一〇冊』（一九二六年四月、大東書局）によると、梅龍鎮はまたの名を「遊龍戲鳳」という、シナリオは明史本で記載された武宗の江南視察を改編した『梅龍鎮傳旧書』という小説に基づいたもの。武宗がおしのびで梅龍鎮に立ち寄った時、兄妹が経営していた旅館に宿泊した。武宗は妹の李鳳姉に見惚れ、彼女とより深い関係を結ぼうとして、身分を明し鳳姉を王宮に迎え入れた。

■天蟾舞台 天蟾舞台は上海商務印書館『上海商業名録』（一九二一年一月、商務印書館）によると、英租界の九江路（浙江路と湖北路即ち大新街角）に位置していた。『申報』（一九一六年一月二五日、申報館）によると、元の名は新新舞台、外見が天蟾に似ていたことから、天蟾舞台と改名した。現在の天蟾舞台は福州路七〇一号元大新舞台の所在地にある。緑葉編『天蟾舞台の拆屋、

天声舞台の組織』（一九三〇年一月六日、大晶報館）によると、天蟾舞台の経営者の顧竹軒は永安デパートを建築するため、天蟾舞台を撤去した。従業員全員が大新舞台に移転する予定と記されている。図版Pは上海時報館編『時報』（一九二七年二月二日）に掲載された天蟾舞台の舞台上の写真である。

■売身投靠 波多野乾一編『支那劇大観』（一九四〇年一月、大東出版社）の「売身投靠」によると、「売身投靠」は小説『双珠鳳』の一節。シナリオは淨雅書屋編『繡像双珠鳳全傳』（一八九二年、淨雅書屋）の第一回『拾鳳』と第二回『訪倪』に該当する。洛陽の秀才文必正は心庵で霍家の令嬢定金に一目惚れをした。彼女の落とした珠鳳を返しに倪老婆という口入屋を訪ね、「姜斌」と偽名し、霍家に身を売った。老婆の娘鳳姉に正体をばらさないように婚約を結んだ。

■玉堂春 『新編戲学滙考・第一〇冊』の「玉堂春」によると、当劇は同名小説の『三堂会審』の一節に基づいたもの。蘇氏（芸名は玉堂春）という娼婦と親しい仲となった王金龍は妓楼から金を盗んだ。激怒した女将は蘇氏を商人に売り飛ばした。商人の妻皮氏は隣家の監生と和姦。彼らは商人を毒害し、罪を蘇氏に着せた。一方、金龍は自身を改め、巡按として蘇氏を助け、側室として迎え入れた。

■梅蘭芳日本公演 濤痕述、露尸記編『梅蘭芳東渡紀実』（一九一九年九月、春柳雜誌事務所）によると、梅蘭芳の訪日公演は一九一九年五月一日に東京の帝國劇場で始まり、一二日が帝國劇場での最終日。追加の要請もあつたが、スケジュールのため叶わなかつた。一九日と二〇日は大阪公会館で、二三日と二四日は神戸の倶楽館で出演し、三〇日午後四時半に天津に帰還。

■観劇料金 上海商務印書館編『上海指南』（一九二二年九月、商務印書館）の「戲園」によれば、料金は席ごとに分けられていた。事前に予約するボックス席は「月樓」、「特別頭等」などがあり、予約なしで座れる席は一等から三等まで、一元から数角の値段に分けていた。観劇の際に果物やスナックは一皿につき一角、お茶は一瓶につき一角、手ぬぐいは無料で提供されると紹介されている。

■観劇料金 上海商務印書館編『上海指南』（一九二二年九月、商務印書館）の「戲園」によれば、料金は席ごとに分けられていた。事前に予約するボックス席は「月樓」、「特別頭等」などがあり、予約なしで座れる席は一等から三等まで、一元から数角の値段に分けていた。観劇の際に果物やスナックは一皿につき一角、お茶は一瓶につき一角、手ぬぐいは無料で提供されると紹介されている。



図版N 『粉墨春秋・蓋天叫舞』の『快活林』での扮装の写真。天叫舞の「全武一本」が載せられた『粉墨春秋・蓋天叫舞』の『快活林』での扮装の写真。



図版O 海光報社編『光報』（一九二五年四月二六日）に掲載された、小翠花が『梅龍鎮』の鳳姉を扮した写真。



図版P 上海時報館編『時報』（一九二七年一月二一日）に掲載された天蟾舞台の舞台上の写真。

「十三 鄭孝胥氏」「十四 罪惡」「十五 南国の美人（上）」
「十六 南国の美人（中）」

■青蓮閣 村松梢風の『魔都』（一九二四年七月、小西書店）では、「青蓮閣は、間口四五十間もあらうと思はれる総二階建ての家で、階下は幾軒にも仕切つて普通の商店になつてゐる。二箇所に、往来から真正面になつて幅の広い階段が附いてゐる」と描写されている。井上進『支那風俗 卷上』（一九二二年四月、日本堂書店）によると、「間口十五間（二間は日本の九尺位）奥行五間の二階を占領して四馬路の真中に大きな金看板をあげて」おり、一階は菓屋や本屋や雜貨屋などの商店が入つていた。中央入口には「凡そ十人程も並んで上れる大梯子」が掛けられており、その裏手には

「視眼鏡、腕力試験器、玉突き台」などが設置されていたという。

■野雉（野鶏）

村松梢風は『魔都』で、「上海の夜を濃厚に彩つてゐるのは『長三』や『幺二』の所謂妓と『鶏』と呼ぶ密淫売婦等の群れである」と書いている。梢風によると、普通の鶏と野鶏とは区別があり、「只の鶏は謂はば高等内侍で、一定の場所へ呼ばれて行つて客を取るだけだが、野鶏となると、茶館でも娯楽場でも往来でも処嫌はず出張して客を引つ張つて来る」と述べており、「鶏の稼ぎ場」として青蓮閣を挙げている。井上進『支那風俗

卷上』によると、青蓮閣に出入する野鶏の総数は三五〇名ほどで、野鶏には必ず一人ずつ老婆が付き添つていたため、併せて約七〇〇名という大人数が楼上を徘徊しており、その賑やかさは

「百万の玩弄箱を顛覆へしたやう」と形容されている。池田信雄の『続上海百話』（一九二二年一月、日本堂）の「上海の支那娼婦」によると、上海における野鶏の人数は民国七年（一九一八年）の調査では、「福州路以東青蓮閣あたりに出没する揚州野鶏」が九七〇人、その他の地域も含めた総計で五三七九人いたとされている。

■小有天

井上進の『支那風俗 卷上』では、「上海でいま、一番はやる支那料理店」の一つとして小有天の名前が挙げられている。芥川はこの店について、「此処は近年物故した清道人李瑞清が、眞眞にしてゐた家ださうである」と書いているが、これについて

は『支那風俗』で詳しく説明されている。同書によると、小有天は開店当初は愛而近路の小さい店だったが、清道人李梅庵の文人仲間と称揚され革命議員にも引き立てられたことがきっかけで栄え、店を三馬路に移して「天晴れ第一流の顔振れとなつた」という。「斯ういふ譚で小有天は上海人士の集る処となり、其後日本人にも知られて続々馬車や自働車が着くやうになつたが、偕て料理はといふと此頃だん／＼退歩して来るやうだ」と書かれている。「清道人李梅庵」という人物については、池田信雄の『上海百話』訂正増補再版（一九二三年五月、日本堂）で、「名は瑞清、仲麟と字し、梅庵はその号で、清道人とは別号である」と説明されている。

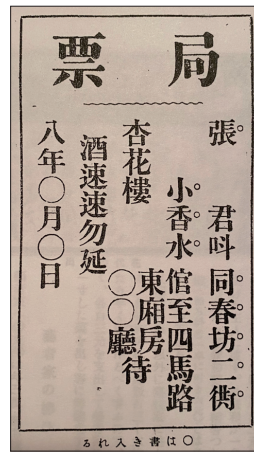
■支那の芸妓

「上海游記」で芥川は「上海では美人を大勢見た。見たのは如何なる因縁か、何時も小有天と云ふ酒樓だつた」と回想し、小有天で出会つた芸者について詳しく述べている。杉江房造編『新上海』訂正増補再版（一九二三年二月、日本堂書店）の「上海の日本人料理屋と芸妓」によると、上海では日本よりも芸妓と知り合いになるのが難しく、「支那芸妓とお馴染になるに二た通りある。その一は此の道に経験ある友達に案内せられて妓館に行く事、その二は書樓から行く事、此の二を除いて外にない」とされている。書樓というのは「芸妓ばかり集めた寄席」のよう

なところで芸妓と馴染みになることができ、「料理屋から御自分が芸妓を呼ぼうとする迄には斯うした馴染を累ねなければ一寸来ない」という。芥川は「私が大勢美人を見たのは、神州日報の社長余洵氏と、食事を共にした時に勝るものはない」と書いており、余洵氏の紹介があったので、林黛玉をはじめ何人も芸妓に会うことができたのだと思われる。

■林黛玉 「上海游記」で、余洵氏は「これがあの林黛玉です」と言いつつ局票を書いて林黛玉を呼び、芥川に引き会わせたといいうことだが、三宅孤軒『上海印象記』（一九二三年五月、料理新聞社）でも、「上海で第一人と呼ばれた名妓林黛玉」と名前が挙がり、「此林黛玉は上海に於て支那人に落籍され後又芸妓となり後天津の支那富豪の有に帰すること数年、再び北京に於て或は芸妓となり或は女優となり到る処で嬌名を唄はれた有名な者である、一昨年来又上海に妓籍を掲げてるが支那人が呼んでも容易に応じないと云ふことである」と紹介されている。図版Qは、島津長次郎編『上海案内』第九版（一九二二年二月、金風社）の「上海の花柳界」に掲載された局票の写真。図版Rは、同書に掲載された林黛玉の写真で、「支那芸妓のお母さん林黛玉」という一文が添えられている。

（原菜摘）



図版Q 島津長次郎編『上海案内』第九版（一九二二年二月、金風社）の「上海の花柳界」に掲載された局票の写真。



図版R 島津長次郎編『上海案内』第九版（一九二二年二月、金風社）の「上海の花柳界」に掲載された林黛玉の写真。

「十三 鄭孝胥氏」「十四 罪惡」
「十五 南国の美人（上）」「十六 南国の美人（中）」

■鄭孝胥の家 中国歴史博物館編『鄭孝胥日記』（一九九三年一〇月、中華書局）によると、芥川は一九二二年四月二四日と五月一七日に鄭孝胥の家を訪問した。同書によれば、一九二一年に、

鄭はフランス租界の徐家滙虹橋路にあった住居と共同租界の南洋路（現南陽路）にあった海蔵楼を所有し、二つの住処を行き来していた。また、桜や松や竹などが海蔵楼の庭に植えられたことが日記の中に記されている。更に、志新の文章「鄭孝胥と海蔵楼」（『晶報』一九三七年四月一日、上海）によると、海蔵楼はイギリススタイルの三階建である。「上海游記」の描写から推測すると、芥川が訪れたのは海蔵楼である。

■日本から取り寄せた桜

『鄭孝胥日記』によると、鄭孝胥「氏が日本から取り寄せた桜」は、当時神戸にいた鄭孝胥の弟鄭孝檉が送ったものである。一九一二年の日記によれば、海蔵楼の庭園には、四〇本余りの桜があった。その桜には、一重桜や八重桜があり、深紅や浅紅や淡い白や淡い黄色や緑などの花の色がある。

■蓮英殺しと云う事件

『申報』（一九二〇年六月一六日、上海）によると、徐家滙の麦畑で女の死体が発見された。翌日の『申報』

では、妓蓮英の失踪が報じられている。一八日の『申報』には、「昨日首絞りに殺された女性は失踪した妓蓮英である」と書いてある。犯人について、『時事新報』（一九二〇年一月二四日、上海）の記事によると、蓮英を殺したのは閻瑞生と呉春芳だった。閻は主犯で、一九二〇年六月九日に蓮英を呼び出した。その後、閻と呉は蓮英を首絞りに殺し、彼女が所持しているアクセサリーを奪っ

て逃走した。閻について、『凶書週刊』（一九二〇年一月二八日、上海）の記事には、「閻瑞生（二十六歳）は震旦大学の学生で、洋行で翻訳などの職を勤めていた。彼は女遊びが好きで、かなりの借金を抱えていた。借金返済のために、いつも派手な恰好をしている妓王蓮英のことを思い出し、強盗殺人の計画を立てた」と記されている。図版Sは、『凶書週刊』（一九二〇年一月）に掲載された王蓮英と閻瑞生の写真。なお、一九二〇年に『花園総理蓮英被害記』や『蓮英被害記』などの小説が出版された。閻の犯行動機について、海虞懊惱生編『花園総理蓮英被害記』第二版（一九二〇年七月、文明小説社）には、「閻は蓮英に好意を示していたが、蓮英は婚約者がいるので、閻を拒み続けた。そのことを知った閻は、焼きもちを焼き、彼女に残酷な仕打ちを加えようと企んだ」と書かれている。小説と記事の間には、相違が認められる。小説は事件を脚色したと考えられる。

■拆白党

周天籟編『白話字辨』（一九三四年八月、上海華文書局）は、「誘惑のような手口で金品を騙し取る人は、拆白党と呼ばれる」と説明している。前述した内容を見れば、主犯の閻は誘惑ではなく、暴力的な手段で蓮英から宝石類を奪い取ったことが分かる。つまり、蓮英を殺したのは、「拆白党と云う無頼の少年団の一人」ではない。沪杭老遊客編『蓮英慘史』第五版（一九二〇年

一〇月、上海世界書局)の表紙には、「拆白党謀財案」(拆白党が財を奪い取る事件)というサブタイトルが書かれている。また、「花園総理蓮英被害記」は、「閨は劇場でスリリングな探偵ものをみるのが好きだ」と紹介しており、「十四 罪悪」には、「探偵物などの活動写真が、悪影響を与えた」という一節がある。以上の情報から、芥川は蓮英殺し事件を題材にした小説の内容を念頭に置いて「十四 罪悪」を書いたように思われる。

■青蓮閣 商務印書館編訳所編『上海指南』第一二版(一九二二年九月、上海商務印書館)によると、青蓮閣は福州路に位置し、ビリヤード場を兼ねる茶館である。また、陳無我編『老上海三十年見聞録』第一二版(一九二八年四月、上海大東書局)の「青蓮閣記」には、「青蓮閣に遊びに行く客はみんな一時の楽しみを求める下品な人だった。知識人は青蓮閣に出入りすることを嫌っていた」という一節がある。更に、陳榮広伯熙編『老上海(下)』第六版(一九二四年二月、上海泰東図書局)には、「青蓮閣に出入りする揚州の妓は九七〇人ある」という記述がある

■売笑婦 王書奴『中国娼妓史』(一九三四年一月、上海生活書店)には、「一九二〇年工部局の調査によると、上海の娼妓人数は六〇一四一人である」と書いている。同書は各等級の娼妓の人数を、甲 長三 一二〇〇人、乙 么二 四九〇人、丙 野鶏

(野雉) 共同租界 二万四八五〇人 英・仏租界に出入りする 一万二三二一人、丁 花煙間釘棚 二万二三一五人と紹介している。

■デル・モンテというカフェ 「New Cafe Del Monte Scores A Success」(一九二〇年八月八日、『The China Press』、上海)という記事によると、徐家滙路にあったデル・モンテは旧名を「Alhambra」といい、リオープンした一九二〇年八月にたちまち人気を集めた。デル・モンテには、ダンスやオーケストラの演奏が楽しめる綺麗な庭があり、踊り場もある。図版Tは、『The China Press』(一九二六年二月)に掲載されたカフェデル・モンテで踊るロシア人のダンサーの写真。また、デル・モンテはサンフランシスコの有名なカフェ「Techan Tavern」から来た経営者Mr.R.L.Elliisを迎えたことが紹介されている。

■愛春 陳榮広伯熙編『老上海(下)』第六版(一九二四年二月、上海泰東図書局)では、愛春の名前が三馬路の南側にいる長三のリストに入っている。一廠が書いた「滄江花史(二)」(『遊戯世界』一九二一年三月、上海大東書局)によれば、愛春は笑顔を見せることが少ないので、「木彫女郎」と称されていた。(張青)



図版S 『図書週刊』(一九二〇年十一月)に掲載された王蓮英と閻瑞生の写真。



図版T 『The China Press』(一九二六年一月二月)に掲載されたカップエデル・モンテで踊るロシア人のダンサーの写真。

「二七 南国の美人(下)」 「二八 李人傑」
「二九 日本人」 「三〇 徐家滙」

■李人傑 「上海游記」に登場する「李人傑」とは李漢俊のことである。中国共産党の創立メンバーの一人で、一九〇四年に日本に留学している。一九一八年に帰国後、一九二一年に共産党第一回大会に上海代表として参加したが、その後離党している。図版Uは一九二〇年八月一八日の『東京朝日新聞』朝刊で、神田生が李漢俊を紹介している記事である。神田によると「殊に上海は、支那官僚圧制の魔手が容易に及ばぬ外国租界地」であるため、「過激思想家の本拠を構へるには最も便利」とされている。李漢俊に

ついても、「日本で支那の過激思想家と目されて居る戴天仇、李人傑の諸氏」のいずれも上海にいて、と紹介されている。神田由美子の『芥川龍之介全集』第八巻(一九九六年六月、岩波書店)の注解によれば、芥川は「上海游記」において、李漢俊を日中の情勢を鑑みて「共産党の代表者」ではなく、「若き支那」という表現を使用してぼかしたとされている。そこで「東京朝日新聞」のデータベースで共産党や共産主義に関する一九二〇年前後の記事を検索すると、「過激派」や「過派」といった表現が使用されていた。共産主義思想が過激であるという認識が当時の日本にあり、芥川は「若き支那」という表現を使用したと考えられる。

■支那人留学生 李漢俊は一九〇四年から一九一八年まで日本に留学していた。日本で共産主義に触れ、それを中国に持ち帰った。李漢俊のように留学する中国人はこの時期多く、吉野作造・加藤繁『支那革命史』(一九二二年一月、内外出版)によると、義和団事件をきっかけに政府が留学生を他国に派遣した。費用の安さや漢字を使用していることなどの利点から日本への留学生が最も多く、『弘道』二九三号(一九一六年八月)によると、七七八人もの支那人留学生が東京帝国大学などの日本の大学に留学していたという調査がある。前項の「李人傑」で述べたように、李漢俊は日本へ留学し、そこで得た共産主義を中国へ持ち帰った。清

国から日本の大学へ留学する中国人が、李人傑以外にもいたことがわかる。

■東亜同文書院 「上海游記」に登場する「同文書院」とは東

亜同文書院のことである。「当時の目的は日支両国学生を收容し、日本学生には支那語を主として学ばしめ、兼ねて政治経済の課を授け、支那学生には日本語を主として学ばしめ、兼ねて科学思想を授くるに在り」と『創立四拾週年東亜同文書院紀念誌』（一九四〇年六月、上海東亜同文書院大学）では説明されている。一九一四年八月一日の『東京朝日新聞』の朝刊には留学生募集の広告が掲載されている。日本人留学生を受け入れるための機関であったが、その後一九一八年には中国人の学生を受け入れる方針を決定、一九一九年には六人の支那人学生が入学した。図版Vは『東亜同文書院創立二十週年根津院長還暦祝賀紀念誌』（一九二一年六月、上海東亜同文書院同窓会）に掲載されている当時の東亜同文書院の写真である。写真を確認すると、本校舎や日本学生寄宿舎の他にも中華学生部正校舎が設けられていることがわかる。

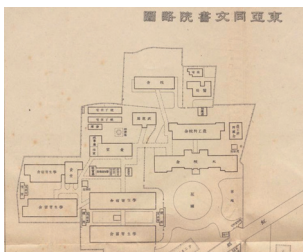
■寄宿舎 「上海游記」では東亜同文書院の寄宿舎から鯉職を芥川が見たことが記述されている。図版Wは前掲の『東亜同文書院創立二十週年根津院長還暦祝賀紀念誌』に収録されている略図であり、これを参照すると、学生寄宿舎は合計で四つ確認できる。

「廊下のつき当りの窓の外に、青い穂麦の海が見えた」「すぐ目の下の麦畑に、支那の百姓が働いてゐた」と『上海游記』にあるが、略図を見る限り敷地内に麦畑は見られない。つまり、東亜同文書院の敷地外を芥川は見ていたのではないかと考えられる。

■徐家滙 徐家滙は嶋津長次郎『上海案内』第八版（一九一九年一月、金風社）では「徐家滙は宗教上又天文臺を以て有名な所である。其歴史は嘗て大臣の位にありし徐氏が明の神宗、萬歴年間耶蘇信徒となり多くの教書を繙譯し財産と土地とを寄附し教会を創立し教義を伝へたに起因して居る」と紹介されている。「耶蘇」とはキリスト教を指し、徐家滙はキリスト教の教会である。また天文台や孤児院、図書館などが併設されている。徐家滙の創設者は徐光啓で、徐光啓はキリスト教や西洋の学問書を多く翻訳したことも有名で、徐家滙の図書館には西洋の学問書の翻訳本も多く保存されていた。このような背景から徐家滙は上海の中の西洋に位置付けられるだろう。一九節「日本人」のあとに二〇節「徐家滙」が置かれているのは、上海の中の日本と上海の中の西洋が対比されていると考えられる。（川端あや）

■林黛玉 陳栄広、伯熙編『老上海』（一九一九年、上海泰東圖書局）によると、林黛玉は元々貧しい家に生まれ、本名は陸金寶という。奉公先で唆されて娼妓の道を歩んでしまい、「小金鈴」という芸名で雛妓としてデビューした。その後、名妓胡宝玉（初の芸名は林黛玉）への憧れにより、芸名を「林黛玉」に変え、人の

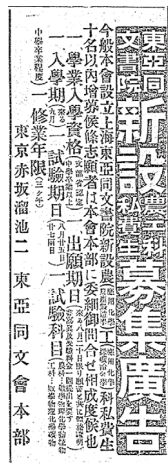
「十七 南国の美人（下）」 「二十一 最後の一瞥」



図版V 『東亜同文書院創立二十週年根津院長選暦祝賀紀念誌』（一九二一年六月、上海東亜同文書院同窓会）。



図版W 『東亜同文書院創立二十週年根津院長選暦祝賀紀念誌』（一九二一年六月、上海東亜同文書院同窓会）。



図版U 『東京朝日新聞』一九一四年八月一日朝刊。

助言により豪奢を売りに名をなした。一九二〇年に、『顔料大王』薛宝潤の妾になかったが、やがて捨てられ、高齢で再び売春の営みに復帰し、「梅逢春」という芸名で商標を粉飾した。『盛京時報』（一九二二年三月一七日、瀋陽）によると、この時期の林はまだ豪奢な身なりでいたが、ほとんど借りものであった。二一年の年末に、林は芸名を「碧霞楼」に変更し、翌年に貧困と病気の中で死した。図版Xは『翡翠』（一九二七年二月五日）に掲載された林黛玉の遺影である（撮影当時五一歳）。

■花宝玉 「小遊芸」（一九二六年第七号、上海）によると、「花宝玉」とは商標のようなものであり、当時は二人の娼妓を指し、「四娘」と「七娘」で区別された。『心声：婦女文苑』（一九二三年第二卷第八号、上海）と『上海画報』（一九二七年第二〇一号、上海）に載せられた写真及び説明によれば、「四娘」の外見は芥川龍之介の描写に一致し、紀行文で登場した「花宝玉」であった可能性が高い。

■三馬路の妓館 汪了翁編『上海六十年花界史』（一九二二年、時新書局・中外日夜印書局）によれば、一九一八年に三馬路の周辺で活動していた高級娼妓は全体（一一六七人）の九〇・二％であり、二二年にこの数字は八一・八％に下がったが、依然として絶対多数を占めていた。葛福田、鮑士英編『上海市行号路図録』

(一九四七年一〇月、福利営業)と対照すると、一八年に彼女たちの夜間外出の半径は一・二キロメートルも超えなかったことがわかる。

■人目につかない妓館 一九二〇年一二月一日の『神州日報』に、公共租界は五年内に妓館を取り締まることを決定し、抽選会の形で毎年五分の一の妓館を閉業させるという記事が掲載されている。翌年の『民国日報』(一九二一年一月四日、上海)に、前述の妓館廃止案への対策として、閉業させられた妓館は往々にして形を変え、住宅を装って営業すると記載されている。葛福田、鮑士英編『上海市行号路図録』(一九四七年一〇月、福利営業)によれば、妓館は住宅区に組み込まれた数多くの横町に隠されていた。この独特な都市構造は大通りの喧騒や、通行人の好奇心を遮断する役割を果たし、売春業の発展を促進した。

■橋の袂の公園(パブリック・ガーデン) 商務印書館編訳所編『上海指南』(一九二二年九月、商務印書館)で紹介されたパブリック・ガーデンの位置と噴水や「時報」、また「S・M・C」はパブリック・ガーデンの運営者である上海工部局の略称だという事実から、「橋の袂の公園」はパブリック・ガーデンであることがわかる。

■ライシウム・シアター ライシウム・シアター(蘭心劇院)

は合計三代ある。一代目は一八五〇年に園明園路、諾門路(今香港路)に建てられた木造の劇院で、二代目は博物院路(今虎丘路)で再建された組積造の三階建てであり、一八七四年一月二七日に開業した。現存している三代目は、一九三〇年に茂名南路に移築したものである。芥川が訪れた一九二一年のライシウム・シアターは二代目であった。図版Yは董世亨編「上海英租界分図」(一九一七年、商務印書館)の局部図。図に示したように、博物館路に「外国劇院」があり、芥川の路線描写と一致しているため、この「外国劇院」がライシウム・シアターの可能性が高い。

■カルトン・カフェ カルトン・カフェは上海商業名録編集処編『上海商業名録』(一九二〇年二月、商務印書館)に「外国客寓および飯店」という節で紹介され、英租界寧波路四号く六号(現寧波路と江西中路の交差点)に位置したと記録されている。また、『小時報』(一九一九年二月五日・二二日、上海)によれば、一九一九年からカルトン・カフェでダンスコンテスト・ダンスコースが開催されたことが分かる。

■上海を離れた日付 高慧勤、魏大海編『芥川龍之介全集』(二〇〇五年、山東文芸出版社)の第五巻に収録された、一九二一年五月一六日に芥川が書いた葉書によれば、同年五月一八日に上海を離れる予定だった。「上海では僅に二三度しか、芝居を見物する

機会がなかった」と「先夜其処に入れられた、支那の芝居の戲単」の記述から、芥川が見物した芝居は紀行文に書かれていて、上海を離れた前日にも観劇したことがわかる。五月一七日に『申報』に掲載された劇目の広告には言及された劇がなかった。一方、五月一六日の広告は「白牡丹」を除いて書かれた劇目と全部一致している。故に、芥川は五月一六日に観劇、五月一七日に予定より一日早く旅立ったと推測される。

■呉景濂 『新聞報』(一九二〇年四月一三日、上海)によると、呉景濂は一九二〇年四月一日に「旧国会衆議院長」として上海に到着した。また、近代史資料編集部編『近代史資料総一〇七号』(二〇〇三年二月、中国社会科学出版社)に収録された「呉景濂自述年譜」によれば、二一年四月の広州選挙事件の後、呉は元々孫中山等人への恩返しに広州を訪れるつもりだったが、仲違いをした孫中山と陳炯明の関係に関わりたくないため、やがて旅を取り消すことにした。芥川に訪問されたのは、前述の原因で「上海に閉じ籠り、退屈極まりない」という時期のことであった。

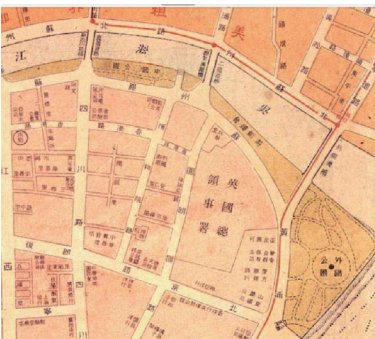
■白蘭花 「上海游記」第一六節の洛娥に対する描写と対照すると、洛娥の服に挿した白蘭花だと、容易に推測される。一九二〇年、「海上名妓 洛娥」と題した洛娥の写真(図版乙)は、包笑天編小説雑誌『小説大観』(一九二〇年第五期、上海文明書局)に林

黛玉の写真と一緒に載せられた。そして、『環球画報』(一九二五年一月三日、上海)は洛娥を「校書(文に通じる妓女)」と形容し、「(洛娥は)北京の風景に憧れ、近頃北京大森里へ移住した。多士済済の北国で楽しくて帰るのを忘れる」と紹介している。

(冷和華)



図版X 『翡翠』(一九二七年一月二日)に掲載された林黛玉の遺影。



図版Y 童世亨編「上海英租界分図」(一九一七年、商務印書館)の局部図。



図版Z 「海上名妓 洛娥」と題した洛娥の写真。包笑天編小説雑誌『小説大観』（一九二〇年第五期、上海文明書局）に林黛玉の写真と一緒に載せられた。

中国における学術文献データベースの利用状況

中国では、学術情報の電子化が急速に進み、研究を進めるにおいて非常に重要な情報源となった。多くのデータベースの中で、最も広く活用されているのはCNKI（中国学術情報サービス）である。そのウェブサイトにはアクセスすれば、各種の学術雑誌、学位（博士・修士）論文、学会論文から、学習と研究に有用な文献を効率的に探し出すことができるので、各分野の研究者に重宝されている。

近年、CNKIのような総合的なデータベースのほかに、人文社会科学に特化したデータベースも開発されてきた。例えば、中国近代史や中日関係に関する資料を探する場合、「全国報刊索引」出版

社サイトによって構築された「中国近代中国語新聞全文データベース（1850-1951）」と「中国近代報刊庫（1833-1949）」の利用を勧めたい。前者は『申報』、『新聞報』、『時報』、『民国日報』など中国近代社会に広く影響を与えていた新聞を収録しており、後者は晩清から民国まで刊行された約三〇〇〇点の新聞・雑誌を収録した大型の歴史文献データベースである。いずれも内政、外交、経済、社会に関する記事・写真を多く収録し、当時の中国の社会情勢を窺い知るための貴重な資料を提供してくれているのである。

（高麗華）

おわりに

上海外国語大学高潔ゼミと東京女子大学和田先生のゼミとの共同授業は、コロナ禍で常態化してきたオンライン授業の経験を生かし、大学院生のオンライン形式の国際交流に寄与した一環と言えるだろう。上海外大の日本語文学専攻の院生にとって、母語話者の先生と院生と一緒にゼミをすることで大きな刺激となり、資料の収集からPPTの作成に至るまで、より一層真面目に取り組むようになった。そして、図書館に行つて、現地で資料を調べることが制限された中で、各種のデータベースなどオンラインで検索できる資料を充分に利用して、二一世紀生れの世代の得意なネッ

ト利用を調査のほうに力を向けてきた。和田先生のご提案で、共同ゼミでの発表を加筆して、文章化することになったが、これは共同ゼミの一つの収穫であると同時に、院生たちにとって、もっと大きな収穫は、日本の研究者の一次資料を利用した地道な考証の重視に感心し、自らの手による調査で近代上海の歴史を知ること、そしてなによりも、中日比較研究への意欲をそそられることにあるのではないかと思う。

(高潔)